

第3節 「陰獣」の人物造形 —寒川・大江春泥・静子の三人を中心に—

はじめに

「陰獣」に登場する中心人物は二人の「探偵小説」家、寒川（語り手の〈私〉）と大江春泥、そして女主人公の静子の三人である。そのうち寒川は探偵役として物語の経緯を手記の形式で描く記録者であり、本作品の語り手でもある。もう一人の「探偵小説」家・大江春泥は静子を脅迫する容疑者で、静子の証言によると、かつて静子の恋人だった平田一郎その人であるが、本当に平田であるか定かではない。そして静子は大江春泥から脅迫された被害者として登場する。本作品の人物設定において、寒川と大江春泥はともに探偵作家であるが、彼らの作風と性格には大きな差異がある。二人の作風について浜田雄介は『「陰獣」論』において次のように説明している。

探偵作家には〈犯人の残虐な心理を思ふさま書〉く〈犯罪者型〉と〈理智的な探偵の経路にのみ興味を持つ〉つ〈探偵型〉との二種類があり、大江春泥は前者、寒川は後者に属する、というのが『陰獣』冒頭の枠組である¹。

以上の引用が示すように、寒川と大江はともに探偵作家であるが、二人の作風はまったく正反対である。しかし〈探偵型〉に属する寒川は大江春泥の作品を批判しながらも、彼の作風に惹かれている。また道徳意識の比較的に強い寒川は物語が展開していくにつれ、次第に静子とともに異常な性的快楽に溺れるようになる。それでは寒川と大江春泥という人物はどのように造形されているか。また女主人公の静子は初登場の時、聖女のように描写されているが、物語の進行につれ、彼女が実は被虐性欲の嗜好を持つ女性であることが明らかになった。この第3節では、二人の探偵作家の作風とその性格を対比に論じつつ、女主人公の静子の性格描写などの分析を通して「陰獣」の人物造形を検証したい。

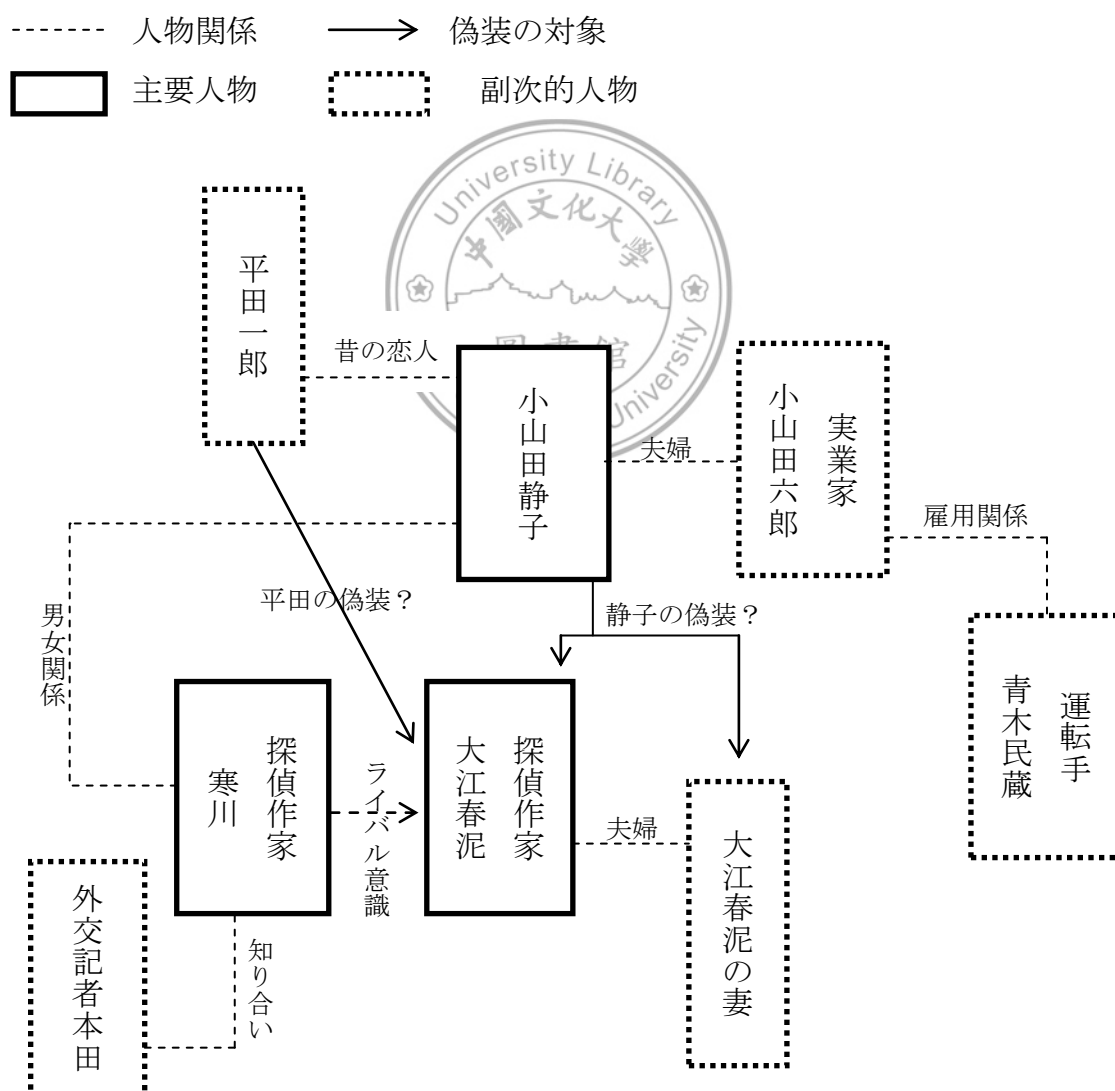
¹ 浜田雄介『「陰獣」論』『國語と國文學』65、1988年8月、p.48。

1. 「陰獣」の人物関係

寒川、大江春泥、静子という三人の人物像を明らかにするため、彼らとほかの副次的人物との関係について、もっと詳しく説明する必要がある。まず「陰獣」に名前が明示されている登場人物は7人いるが、主要人物は前述の通り探偵役の寒川と容疑者の大江春泥、そして女主人公の小山田静子の三人である。そして副次的人物として、被害者の小山田六郎、静子の昔の恋人の平田一郎（大江春泥と同一人物である可能性がある）、外交記者の本田、小山田家の運転手の青木民蔵らがいる。そして名前は明されていないが、大江春泥妻も登場している。これらの全部の人物の関係は次の図（一）にまとめた通りである。

図（一）「陰獣」の人物相関図

※筆者作成



寒川、大江春泥、静子の三人の主要人物の人物造形については次に論じることとして、ここでは主として主要人物の三人とほかの副次的人物の関係を述べたいと思う。まず小山田一家の関係をみてみよう。以上の図（一）が示すように、実業家・小山田六郎は静子の夫である。彼らの夫婦関係は円満であるが、六郎は静子に性的虐待を加えていた。しかし大江春泥が送った二通目の脅迫状が届いた日の二日後、六郎が誰かの手によって、被害者となったのである。そして小山田家に運転手として仕えているのが青木民蔵である。小山田六郎が生前に青木民蔵にあげた手袋のボタンが取れて、そしてそのボタンが一つの物証となって寒川に発見されたのである。青木の証言は寒川の推理を支える大事な証拠なので、青木民蔵は証人と言える。

そして静子と平田一郎の関係であるが、学生時代に平田一郎は静子と付き合いがあったことがあり、二人は恋人であった。しかし平田一郎は静子から別れ話をされても彼女にうるさく付き纏った。怖くなった静子はその後に転居し、平田の執念から逃れようとした。静子のもとに届けられた脅迫状には、平田一郎は自分こそ人気の推理作家・大江春泥であると明したが、大江春泥の真実身分は本当に平田一郎なのか、それとも静子の偽装なのか、最後まで謎のままである。

次は外交記者の本田であるが、彼は春泥の原稿を担当する編集者の一人であり、寒川に春泥に関する情報を伝えている。そして大江春泥とその妻を見たことのある人でもある。寒川は本田から得た春泥の妻に関する情報をもとに、春泥妻と静子の共通点に気付き、静子が春泥の妻に扮したのではないかとの推測に至った。よって本田も寒川に推理の論証を提供した証人の一人である。

最後は大江春泥の妻であるが、本田は彼女について「仲々の賢夫人」(p.580)と評価し、厭人癖がある春泥の対外連絡役であると寒川に告げている。春泥妻の外見に関する本田の証言によると、彼女は「眼鏡をかけていた、金歯をはめていた、歯痛止めの貼り薬をしていた、洋髪に結って丸顔に見せていた」(p.658)。本田の考えを聞いた寒川は静子が一人三役して、世間の目を騙したと考えたが、それについても確実な証拠があるわけではなかった。このように、春泥の妻という人物の存在、及び彼女の本当の姿も大江春泥と同じ、最後まで謎のままである。

2. 寒川の人物造形

「陰獣」の冒頭で、寒川（語り手の〈私〉）は自分について、「ごく健全で、

理智的な探偵の径路にのみ興味を持ち、犯罪者の心理などには一向頓着しない様な作家」(p.559)、「いや恐らく私程道徳的に敏感な人間は少いと云ってもいいだろう」(p.559)と述べている。この点から見れば、道徳意識の有無は寒川が自分を評価する重要な基準であることがわかる。

寒川は自分が道徳規範を守る人で、「探偵小説」を書くに際しても、「理智的な探偵の経路」に沿って物語を考えると自負している。そのために「犯罪者型」の探偵作家・大江春泥の冷酷かつ残虐性の高い作風には賛同できない一面を示している。また、寒川は自分と同時に探偵作家として文学界に登場した大江春泥の作品を強く批判したりした。しかし「けなすのは多くは私の方で、春泥は時たま私の議論を反駁して来ることもあったが、大抵は超然として沈黙を守」(p.577)り、「彼の作品が喝采される毎に、云い様のない嫉妬を感じずにはいらなかった。私は子供らしい敵意をさえ抱いた。どうかして彼奴に打勝ってやり度いという願いが、絶えず私の心の隅に蟠っていた」(p.577)所から見れば、寒川は春泥の文才が羨ましく、それゆえに春泥に敵意を抱いていたことがわかる。

以上に見てきたように、寒川は自分が道徳意識の強い人であると認識しているものの、彼の手記、つまり小山田氏変死事件の経緯を見ると、寒川は彼自身が思うほど強い道徳意識の持ち主ではないことがわかる。

浜田雄介は『『陰獣』論』で寒川の性格について「姦通罪の存在する時代に、人妻と知って恋文を送る人間が、どうして自らを〈道徳的に敏感〉な〈善人〉と規定できるのだろうか²」と寒川の性格の矛盾を指摘し、そして寒川が「猜疑心、秘密癖、残虐性を以て満たされていた」(p.578)大江春泥の作風に惹かれる点からも、彼自身が「ごく健全で、理智的な探偵の径路にのみ興味を持ち」、「道徳的に敏感な人間」などの自己認識と矛盾することを指摘している。

筆者が考えるには、寒川が静子の夫・小山田六郎が死んだ後、静子との交際が深まっていき、さらに簡単に静子の性的変態趣味を受け入れ、彼女とともに性的虐待の遊戯に耽っている点から見ても、寒川はどちらと言うと、むしろ道徳意識の弱い人ではないだろうか。

それでは、寒川はなぜ自分が道徳意識の強い「探偵型」の探偵作家と強調しているのか。それに最後には、寒川は自分の推理が実は妄想なのではないかと

² 注1 前掲論文参照、p.48。

疑い、そして自分のせいで、事件が永遠に解決できない状況になったと後悔している。しかし一連の事件が終わった後で回想しながら記した手記の冒頭で、彼はまた「そのお人好しで善人な私が、偶然にもこの事件に関係したというのが、抑も事の間違いであった」(p.559)と自分が善人であるのと、事件に係わったのは偶然であることを強調している。さらに「若し私が道徳的にもう少し鈍感であったならば、私にいくらかでも悪人の素質があったならば、私はこうまで後悔しなくても済んだであろう」(p.559)と自分が道徳意識の強い人だから後悔し、そしてもし自分の道徳意識がもう少し弱かったら、それほど後悔はしないものだろうと自分の道徳意識を強くアピールしている。しかし逆に考えれば、彼の道徳意識がもう少し強かったら、そもそも事件は静子の死をもって結末を迎えたことはないはずである。

そして探偵作家の類型から見れば、寒川は実は「犯罪者型」の探偵作家が描く人間の冷酷、残虐などの異常心理に深く興味を持つ人なのである。しかし寒川は手記の冒頭で、自分が道徳意識の強い人と繰り返し述べている点を見れば、彼は自分の本音と向き合うことができないことがわかる。寒川は事件の発端から事件が終るまでの一部始終を記録したが、彼は自分を健全で、かつ道徳的な人ということに疑いを持たずにいたのである。

3. 大江春泥の人物造形

大江春泥のもとの姿と真実の身分は物語の最後まで謎のままであり、春泥に関する直接的な描写はない。しかし彼に関する情報は作中人物によって伝えられている。まずは寒川の春泥に対する評価である。そして外交記者の本田が提供する春泥についての情報である。最後には脅迫状に記された平田一郎こと大江春泥の、自分の言動に関する記述である。

まず寒川の春泥評であるが、筆者は本論第3章第1節「「陰獣」の構造分析—「探偵小説」の三要素についての考察—」において、春泥の不可解な行動をまとめ、表(一)として提示している。そして表(一)にあるように、春泥の作品から洩らしている異様な「猜疑心」「秘密癖」「残虐性」などの恐ろしい犯罪欲と、日常生活における「厭人病」「秘密癖」など不可解の生活スタイルは春泥の異常な性格を示している。

次に本田が提供する春泥の情報を見てみよう。寒川は春泥のことを調査するために本田と接触をもった。そして春泥には妻があり、また二年の間に七つの

場所を転居したことを本田から聞いた。本田はまた春泥が人と話すのが苦手で、外見は醜く、太っている男であると証言している。彼はさらに春泥の噂について次のように述べている。

そんな人嫌いで、しょっちゅう寝ている男が、時々変装なんかして浅草辺をぶらつくってという噂ですからね。しかもそれが極って夜中なんですよ。本当に泥棒か蝙蝠みたいな男ですね。(p.582)

以上の引用を見ると、春泥は人嫌いの厭人病があるだけでなく、噂が本当であれば彼には変装癖もあり、しかも本田は浅草公園で春泥の道化姿を直接に見たことがある。しかし本田が春泥の家を訪れた際に見たよく太っている男は本当の春泥なのか。また本田が浅草公園で目撃した道化は本当に春泥が扮したもののなのか。これらは誰かが意図的に作り上げた春泥の人物像という可能性はないだろうか。

最後に脅迫状に描かれている春泥の性格であるが、縷々述べてきたように、脅迫状を出したのは平田一郎という静子の昔の恋人だった人であり、彼は自分が作家・大江春泥であると主張している。一通目の脅迫状で、春泥は「あの猜疑心、あの執念、あの残虐、それらが悉く私の執拗なる復讐心から生れたもの」(p.571)と復讐に対する自分の執念の深さを語っている。

そして二通目の脅迫状で、「お前も知っている通り、私は夜毎のお前の行為を眺めている内に、当然お前達の夫婦仲の睦みさを見せつけられた。私は無論烈しい嫉妬を感じないではいられなかった」(p.587)と静子夫婦に対する自分の嫉妬心を強烈に表明している。また、自分が常に静子夫婦を監視していることも告げている。これらのことから静子への脅迫を楽しむ春泥の残虐性が垣間見られる。つまり春泥は復讐の執念、強烈な嫉妬心、恐ろしい残虐性を持ち合わせた人物で、しかも覗きという異常行為を平気に行う人ということがわかる。

以上の寒川の認識、本田の証言及び二つの脅迫状に記されている大江春泥の人物の特質をまとめておくと次のようになる。

(1) 大江春泥に対する寒川の認識

- ①春泥の作品には異様な「猜疑心」「秘密癖」「残虐性」が満ちている
- ②日常生活の「厭人病」「秘密癖」など不可解な生活スタイルをしている

(2) 本田の証言

- ①常に転居する
- ②人嫌いの厭人病がある
- ③醜く、太っている
- ④変装癖がある

(3) 平田一郎（大江春泥）の脅迫状の内容

- ①復讐に対する執念
- ②強烈的な嫉妬心
- ③恐ろしい残虐性
- ④覗きなどの異常行動

以上の大江春泥の人間像を見ると、大江春泥の人物造形は主に異様な犯罪欲や残虐と孤独性、異常な行動などの特質を有する人物として描かれていることがわかる。このような特質は「陰獣」のほかにも似たような設定が見られる。例えば筆者が第3章で論じた作品「屋根裏の散歩者」の主人公・郷田三郎は春泥と同じ、常に転居し、他人の生活を覗き見る。また同じ設定として変装癖がある。これらの点を見ると、乱歩が造形する容疑者の多くは、異様な癖あるいは異常心理を持つ人が多いということがわかる。

4. 「陰獣」に見られる江戸川乱歩の分身たち

春泥という容疑者の人物特質が乱歩のほかの作品の容疑者にも見られるだけでなく、春泥の作品は著者乱歩の作品と彷彿するものが多いことにも目を向ける必要がある。「陰獣」において春泥の作品として名前が挙げられたのは、「屋根裏の遊戯」（乱歩の「屋根裏の散歩者」）、「一人二役」（同「一人二役」）、「一枚の切手」（同「一枚の切符」）、「B坂の殺人」（同「D坂の殺人事件」）、「パノラマ国」（同「パノラマ島綺譚」）、「一銭銅貨」（同「二銭銅貨」）などであるが、これらがすべて乱歩の作品のタイトルと類似しており、乱歩自身が春泥のモデルであることは明らかである。

また、作家名の類似から、大江春泥の「江」、寒川の「川」は「江」戸「川」乱歩から取っているものと思われる。乱歩自身は「主人公の私という人物は、今だから書いてもいいが、実は甲賀三郎を念頭においていた。モデルというわけではないけれども、あの人物は乱歩即ち春泥と対蹠的な作風の作家という点

が甲賀三郎なのである³」と甲賀三郎こそ寒川のモデル人物と述べているが、乱歩自身も少なからず作中人物の寒川に自分の一部を投影している。また健全な理知的作風を特徴とする寒川が「犯罪型」の作品に惹かれているという矛盾も、乱歩自身の経験と似ている。つまり大江春泥と寒川の人物造形は二人とも江戸川乱歩の影が見られる。鈴木貞美は「陰獣」論において、平田一郎、小山田六郎と江戸川乱歩の関連性について次のように述べている。

江戸川乱歩の本名、平井太郎に最も近い名づけは平田一郎であるが、静子の証言によるなら、彼はいまは大江春泥という変態趣味の探偵作家となっており、先にもふれたように、その探偵小説の題名などさまざまな点で、読者に江戸川乱歩その人を想像させるように仕立ててある。(中略) また、乱歩は父親ゆずりの事業家肌も一面もっていたから、実業家・小山田六郎もその分身であろう⁴。

鈴木貞美の論を見ると、平田一郎、小山田六郎も江戸川乱歩をモデルしていることがわかり、永野宏志は「飛行解読者、無限へ—江戸川乱歩『陰獣』における危機/恐慌的な時空間について—」において、「本格探偵小説家「寒川」、実業家「小山田六郎」、脅迫者「平田一郎」、探偵小説作家「大江春泥」に作者の影を見出す⁵」と指摘している。永野はさらに「陰獣」を次のように評価している。

読者は、そこに物語世界で生きる登場人物たち以上のもの、「江戸川乱歩」「平井太郎」という名前の一部をページの上にばら撒かれた別の記号として眺めている。その欲望を触発するように、紙面には「屋根裏の遊戯」等の過去の江戸川乱歩原作の小説とわかる変名がそこかしこに織り込まれ、陳列する商品に欲望を集中させるように窓外の風景を極力隠そうとするデパート空間にも似た、「江戸川乱歩」という記号に満ちた閉じた時空間を作り出している⁶。(傍点原文)

³ 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第3巻 陰獣』、光文社、2005年、p.672。

⁴ 鈴木貞美「「陰獣」論」「江戸川乱歩の魅力—生涯100年〈特集〉」『国文学解釈と鑑賞』59、至文堂、1994年12月、pp.96-97。

⁵ 永野宏志「飛行解読者、無限へ—江戸川乱歩『陰獣』における危機/恐慌的な時空間について」『武蔵野女子大学文学部紀要』2、2001年、p.79。

⁶ 注5前掲論文参照、p.79。

永野の論を見ると、「陰獣」という作品の内容は、乱歩の前期作品、作風及び「探偵作家」としての乱歩自身が連想され、「陰獣」がまるで江戸川乱歩の作品を展示する一つのデパートみたいな空間だという。このように乱歩は巧みな人物造形と性格描写を通して、自分の過去の小説やその内容を一つの作品の中に集約しているのである。

5. 静子の人物造形

「陰獣」の女主人公の小山田静子について最初は「古めかしい油絵の聖女の像」(p.563)のような「聖女」として描かれているが、次第にマゾヒズムという変態趣味を持つ「みだらがまし」(p.649)い女に変わっていく。

静子はある日学生時代の恋人・平田一郎から脅迫状を送られた。不安になった彼女は、探偵作家の寒川に脅迫状のことや自分の秘密を打ち明けた。静子の夫・小山田六郎が脅迫状の予告通りに殺害されるまで、二人は3回会っている。静子の夫が謎の死を遂げた後、二人は恋仲になって、こっそりと会うようになった。二人が男女関係になるまでに、二人が対面する場面は主に7回ある。その後、二人は性的関係まで発展した。

この7回の対面で、静子は寒川の前で常にかつ弱い女性のように振舞っていたが、同時に積極的な一面も示している。脅迫されて、小動物のように怯えている静子について次のような一節がある。

「この頃大変心配なことが起りまして、夜も寝覚め勝ちでございます」
彼女はある手紙にこんなことを書いた。文言は簡単であったけれど、その文言の裏に、手紙全体に、恐怖に戦っている彼女の姿が、まざまざと見える様だった。(p.565)

そして3回目の対面で、静子は恐怖のために冷静を失った様子を寒川に見せている。

彼女の唇は、青白い顔色と見分けられぬ程色を失っていた。「先生、わたくし、頭がどうかしたのではないかと思いますわ。でも、あんなことが、本当だったのでしょうか」

静子は気でも違ったのではないかと疑われる調子で、囁き声で、訳の分

らぬことを口走るのだ。(pp.588-589)

以上の引用があるように、静子は寒川と関係を結ぶ前に、従順的弱い女性の一面があるが、それらの行動の背後には、意外にも静子の積極性が見られるのである。例えば初対面で、静子は自ら寒川に近づき、話をかけた。そして2回目で、静子は自ら寒川の居所へ相談に向った。そして3回目では、静子が寒川に電話をかけて彼を自分の家に呼んだ。この3回の行動を見れば、最初に行動を取ったのは、すべて静子のほうからであった。つまり静子は寒川と会うためにいつも何かの口実を作ったのである。この点から考えれば、静子は非常に積極的な一面を持っている。特に3回目において、静子は天井裏の声を確かめるために、寒川の手を取って彼を部屋の一隅へ案内した。これは大した動作ではないが、静子と寒川のはじめの身体接触としてこの身体動作はやはり留意すべき点である。

次に4回目の対面であるが、それは静子の夫の死体が発見された当日の夕方に寒川が小山田家を訪れた場面である。

私は折を見て、静子と私丈けが知っている秘密について相談する為に、「ちょっと」と云って、彼女に別室へ来て貰った。静子はそれを待っていた様に、一座の人に会釈すると、急いで私のあとに従って来たが、人目がなくなると、「先生」と小声で叫んで、いきなり私にすがりつき、じっと私の胸の辺を見つめていたかと思うと、長いまつげが、ギラギラと光って、まぶたの間がふくれ上ったと見るまに、それがやがて大きな水の玉になって、青白い頬の上を、ツルッ、ツルッと流れるのだ。(pp.602-603)

以上の行動だけ見れば、静子は夫の死を非常に悲しんでいることがわかる。しかし寒川に縋り付くような身体接触は、静子が自ら取った行動である。そして寒川が静子を慰めようと彼女の手を握ったが、静子はそれを拒否しなかった。

そして6回目の対面において、静子はガラス窓の外の白犬の影に驚かされて寒川に抱きついた。このような反応を示す静子は弱々しく見えるが、静子の積極的アプローチの一面が見られる。そしてこれらの接触がなかったら、寒川も短時間に静子を好きになったりはしなかっただろう。

6回目の対面で、寒川が静子をキスしたが、「彼女の方でも、決して私をしり

ぞけなかったばかりか、私を抱いた彼女の手先に、私は遠慮勝ちな力をさえ覚えたとであった」(p.614)。この描写から見れば、寒川の愛をひそかに心の中で期待している静子の様子がはっきり示されている。

7回目の対面で、寒川の推理を聞いて、安心した静子は積極的に酒の弱い寒川に酒を勧めた。そして静子は酔っぱらっている寒川からの逢引の要求をためらうことなく、極自然にそれを受け入れた。この点から見れば、寒川に酒を勧めることは、寒川との関係を一步前に押し進めるための行動と解して良かろう。静子は寒川の前では弱い女性のように演出しているが、恋の駆け引きの点において、彼女はむしろ主動的立場に立ち、さらに寒川から告白させようように数度にわたってかまを掛けたのである。

以上に見てきたように、静子は寒川との接触機会を積極的に作り、それだけではなく、寒川には常に弱々しい一面を見せている。このような彼女の行動にも実は、彼と更なる親密関係を図ろうとする積極さが読み取れる。

おわりに

この一節では、「陰獣」における寒川と大江春泥、小山田静子という三人の主人公の人物造形について論じてみた。

寒川と春泥は探偵作家であるが、二人の作風と性格は大きな差異がある。寒川の作風は「探偵型」、そして自分を道徳意識の強い人と認識している。春泥は「犯罪者型」の作家で、そして異様な犯罪欲や残虐などの特質を作品に示している。

本作品の語り手である寒川は、春泥に反感を覚えつつも、彼の作風に惹かれている。そして簡単に静子と関係を結んだ点や、彼女とともに性的虐待の遊戯に耽けるようになった点から見れば、寒川は自分が思うほどの道徳意識の強い人ではないことがわかる。

そして小山田静子はマゾヒズムという被虐性欲の持ち主である。彼女は常に従順そうな一面を寒川に見せているが、彼女の行動を分析すれば、むしろ主導権を握ったのが静子であり、そして寒川ともっと親密になろうと自ら行動を起こしたのである。つまり静子はか弱い一面を寒川に見せているが、彼女は実は芯の強い女性ではなかろうか。

乱歩は『陰獣』において、甲賀三郎が寒川のモデルであると述べているが、同時に自分もそのモデルの一人である。そして大江春泥のモデルはいうまでも

乱歩自身であり、彼の経歴や、作品及び作風、すべて乱歩自身と重ねられる。

「陰獣」は乱歩作品の魅力を集大成する代表作であるが、その魅力の一つに巧みな人物造形がある。以上に論じてきたように「一人二役」「一人三役」のようなトリックや、個性豊かな性格描写が、「陰獣」にありきたりの本格推理では味わえない、幻想・猟奇的なサスペンスを与えているのである。



